

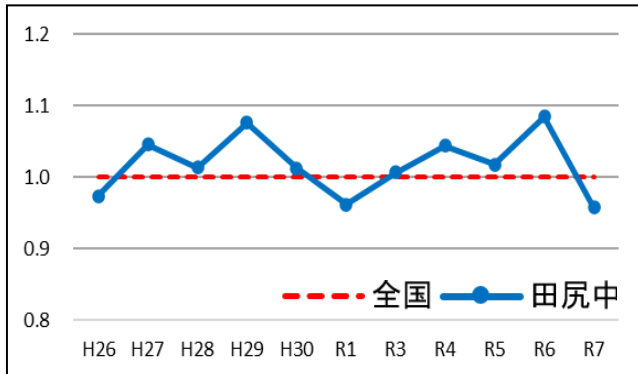
□ 結果概要 全国平均を下回った

全体の平均正答率は全国平均を2.3ポイント下回っており、学習指導の改善を図る必要がある。全14問のうち正答数が6問以下の「学力課題のある生徒」の割合は全国平均より0.3ポイント少ない。

全国平均を大きく下回る（－5ポイント）設問は4問あり、特に「事象や行為を表す語彙についての理解（言葉の特徴や使い方）」と「資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫すること（話すこと・聞くこと）」に課題が見られた。

□ 正答率の状況（全国平均正答率を1.0とした場合の田尻町の平均正答率）

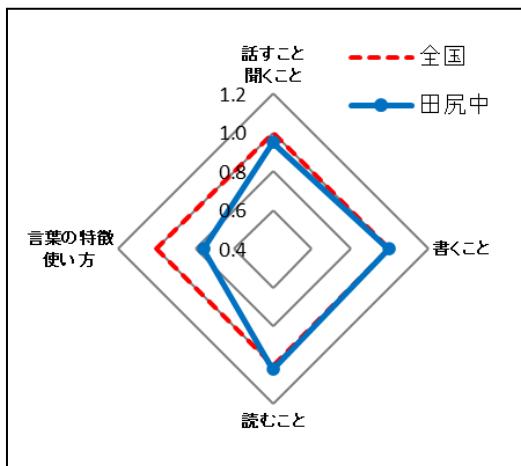
◇ 正答率対全国比 経年変化



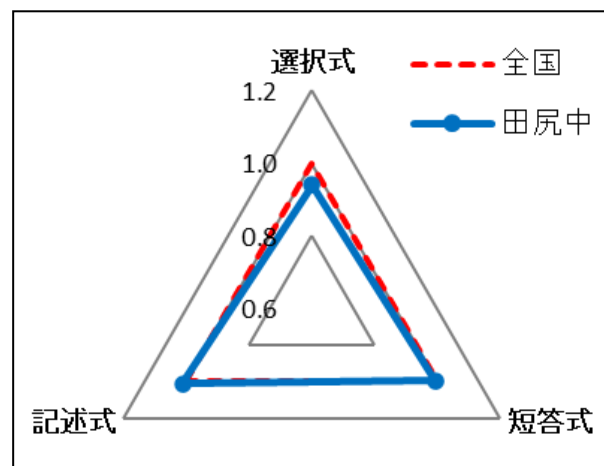
全ての領域において、正答率（対全国比）は前年度を下回った。また、「話すこと・聞くこと」の正答率（対全国比）は2年連続で低下している。

前年度課題であった「記述式」問題に若干の改善が見られた。

◇ 正答率対全国比 領域別比較



◇ 正答率対全国比 問題形式別比較



□ 具体的な児童の状況等（○：成果 ●：課題）

○読むこと(思判表) 文章の構成や展開について、根拠を明確にして考えることができるかどうかをみる問題について

本問の正答率が20.5%であり、全国平均を3.4ポイント上回った。文章の構成や展開の工夫による効果について、物語の内容を適切に取り上げて考えることができている。今後も、指導に当たっては、課題に対して自分の考えと考えを支える根拠となる部分が、適切につながっているかを吟味する場面を取り上げることが重要である。

●言葉の特徴や使い方(知技) 事象や行為を表す語彙について理解しているかどうかをみる問題について

本問の正答率が39.7%であり、全国平均を21.3ポイント下回ったことから、事象や行為を表す語彙の理解に課題があると考えられる。今後、指導に当たっては、語句の意味調べに終始するのではなく、個別の語句に関連付け、「語句のまとめ」として「語彙」に関する概念的な理解を促すような場面を取り上げることが重要である。

●話すこと・聞くこと(思判表) 資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することができるかどうかをみる問題について

本問の正答率が15.4%であり、全国平均を7.8ポイント下回ったことから、資料や機器を用いて、自分の考えが分かりやすく伝わるように表現を工夫することに課題があると考えられる。今後、スライドを示しながらスピーチをする際に、スライドが効果的に役割を果たしているかを検討し、話し言葉やスライドがより良いものになるように改善する学習場面を設定することが重要である。

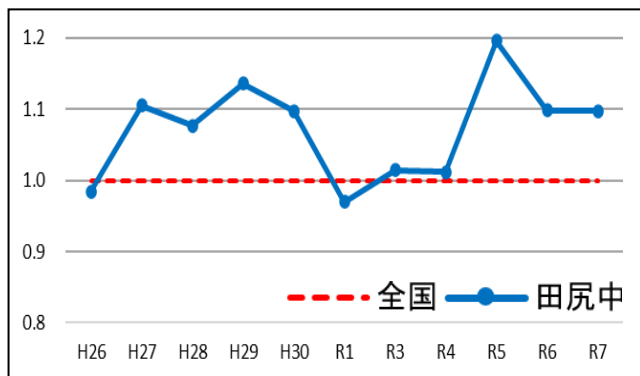
## □ 結果概要 全国平均を大きく上回った

全体の平均正答率は全国平均を4.3ポイント上回っており、全国平均を大きく下回る（－5ポイント）設問もなく、全般的に定着が図られている。また、全15問のうち正答数が4問以下の「学力課題のある生徒」の割合は全国平均より6.2ポイント少ない。

一方、全国平均を下回る設問は5問あり、特に「相対度数の意味とその求め方の理解（データの活用）」に課題が見られた。

## □ 正答率の状況（全国平均正答率を1.0とした場合の田尻町の平均正答率）

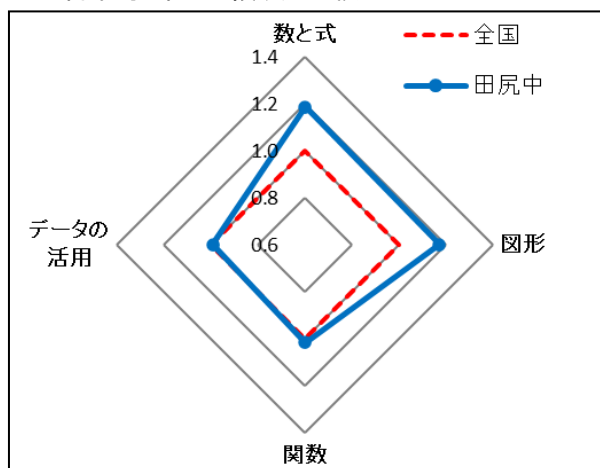
### ◇ 正答率対全国比 経年変化



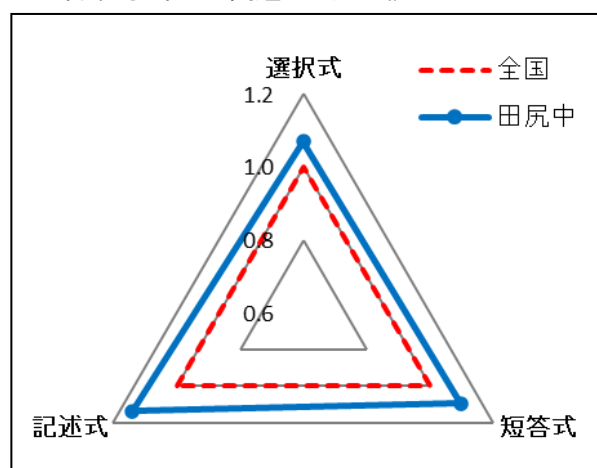
「数と式」「図形」の正答率（対全国比）は3年連続で全国平均を大きく上回った。一方、「データの活用」「関数」の正答率（対全国比）は2年連続で低下している。

「記述式」問題の正答率は（対全国比）は2年連続で上昇している。

### ◇ 正答率対全国比 領域別比較



### ◇ 正答率対全国比 問題形式別比較



## □ 具体的な児童の状況等（○：成果 ●：課題）

**○数と式(思判表)** 式の意味を読み取り、成り立つ事柄を見だし、数学的な表現を用いて説明することができるかどうかをみる問題について

本問の正答率が41.0%であり、全国平均を15.3ポイント上回った。連続する2つの3の倍数の和がどんな数であるかを、文字を用いた式を読み取って説明することができる。今後も、数に関する事象を考察する場面では、成り立ちそうな事柄を予想し、予想した事柄が成り立つかどうかを判断し、成り立つ理由や成り立たない理由を数学的に説明すること、さらに、問題の条件を変えるなどして、統合的・発展的に考察することが重要である。

**○数と式(知技)** 数量を文字を用いた式で表すことができるかどうかをみる問題について

本問の正答率が66.7%であり、全国平均を14.8ポイント上回った。数量を文字を用いた式で表すことができる。指導に当たっては、具体的な数や言葉を使った式などを利用して数量を捉えたり、表した数量が正しいかどうかを事象と関連付けて吟味したりする活動を取り入れることが重要である。

**●データの活用(知技)** 相対度数の意味を理解しているかどうかをみる問題について

本問の正答率が38.5%であり、全国平均を4.0ポイント下回ったことから、与えられた度数分布表について、ある階級の相対度数を求めることに課題があると考えられる。今後、指導に当たっては、単に求め方を覚えるのではなく、相対度数などの基礎的・基本的な用語が表す意味を正しく捉えられるようにすることが重要である。割合に関する内容については、小学校算数の学習内容とも関連付けながら、「比べる量」と「基にする量」との関係を正しく理解できるようにする。

結果概要 全国平均を少し上回った

全体の平均 I R T スコアは 5 1 5（全国平均 I R T スコアは 5 0 3）であり、全国を 1 2 ポイント上回った。また、I R T 3 5 0 未満の「学力課題のある生徒」の割合は全国平均より 3. 2 ポイント少ない。

一方、公開問題 1 0 問のうち、全国平均を大きく下回る設問は 2 問あり、「小腸の柔毛・肺の肺胞・根毛の共通点を捉えること」と「資料に書かれた粒の大きさに着目しつつ、地層の特徴から水のしみ出し方を予想すること」に課題が見られた。

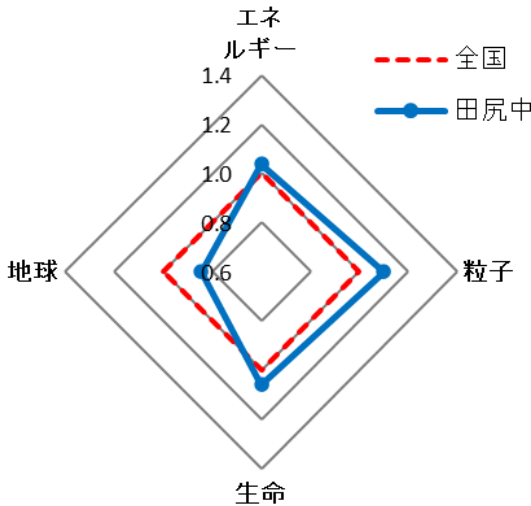
※中学校理科は今年度から 1 人 1 台端末を活用したオンライン（I R T 方式）で実施。I R T とは生徒の正答・誤答が問題の特性によるのか、生徒の学力によるのかを区別して分析し、生徒の学力スコアを推定する統計理論のことである。問題は全日程共通 6 問と実施日により異なる公開問題 4 問、生徒ごとに異なる非公開問題 1 6 問の計 2 6 問あった。

※ I R T スコアとは I R T に基づいて各設問の正誤パターンから学力を推定し、5 0 0 を基準とした得点で表したものである。

□ 公開問題 10 問における正答率の状況（全国平均正答率を 1. 0 とした場合の田尻町の平均正答率）

◇ 正答率対全国比「領域」別比較

◇ 正答率対全国比「教科の観点」別比較



	平均正答率(%)		正答率 対全国比
	田尻町	全国	
知識・技能	59.7	54.2	1.10
思考・判断・表現	50.8	49.4	1.03

□ 具体的な児童の状況等（○：成果 ●：課題）

○**粒子(知技)** 塩素の元素記号を問うことで、元素を記号で表すことに関する知識及び技能が身に付いているかどうかをみる問題について

本問の正答率が 6 1. 5 %であり、全国平均を 1 6. 6 ポイント上回った。多くの児童が、「C l」と表記し、2 文字の元素記号について 1 文字目「大文字」、2 文字目「小文字」で表すことを理解している。また、誤答例では、分子を表す化学式で書いた生徒が全国平均より 3. 3 ポイント多かった。今後も、指導に当たっては、身に付けた個別の知識及び技能を分野や領域を横断して繰り返し活用し、基礎・基本の確実な定着を図ることが重要である。

○**生命(知技)** 水の中の生物を観察する場面において、呼吸を行う生物について問うことで、生命を維持する働きに関する知識が概念として身に付いているかどうかをみる問題について

本問の正答率が 3 7. 2 %であり、全国平均を 7. 5 ポイント上回った。すべての生物が呼吸を行うことを理解している。また、誤答例では、動画内で動かない「ミカヅキモ」を選ばなかった生徒が半数を上回った。動画をよく見て違いを理解したもの、「動かない生物は呼吸しない」と捉えるなど、知識の活用が不十分だったとみられる。

●**生命(思判表)** 小腸の柔毛、肺の肺胞、根毛に共通する構造について学習する場面において、共通性と多様性の見方を働かせながら比較し、多面的、総合的に分析して解釈することができるかどうかをみる問題について

本問の正答率が 2 9. 5 %であり、全国平均を 5. 3 ポイント下回ったことから、小腸の柔毛・肺の肺胞・根毛の共通点を捉えることに課題があると考えられる。今後、学習指導に当たっては、関連のある複数単元をつなぐ学習活動を展開し、「深い学び」の視点による授業改善を進めることが重要である。